

カリブ海・グアドループ島

白い砂浜にトップレスのマドモアゼルたち

妙法の種子、パリの風に乗ってカリブの小島に

まさか、こんな自然な形で、マダム、マドモアゼルたちの美しい肢体を目にすることになるとは予期しなかった。カリブ海の明るい太陽の下。砂浜で、ホテルのプールサイドで輝くような白い肌をさらし、日光浴をするフランスから訪れた観光客——。



女性の3分の1ほどはトップレスである。12月、陽光の少ない北の本国から来て、少しでも多くの太陽を体に浴びようと、胸を隠していた水着も取り去り、浜辺に横たわる婦人。キャットキャットと水しぶきをあげて走り回る少女たちの、胸の硬い蕾が陽光にキラキラ光る感じだ。

カメラを手にした自分は、シャッターを押したい衝動に駆られながらも、誤解を避けるために（また、せっかく撮った写真の入っている仕事用のフィルムを、それがもとの、そっくり巻き上げられても困ると思って）、一度もレンズを彼女らに向けられなかった。そもそも、ポロシャツとはいえ、衣服を身にまとった男、しかも、肌色の違う東洋人がそこにいること自体、不自然で不釣合いに思えたのだった。

かつて、ジスカール・ジスタン大統領の音頭で米、仏、西独の4カ国首脳会談の“場”ともなったフランスのグアドループ島。そんなカリブ海に浮かぶ小さな島にもSGI

エメラルドグリーンのカリブ海メンバーが活躍している。「面白い話題を新年号に！」——本社からの指示を受けた私は、さっそく任地のパナマから飛行機で飛んだのだった。

グアドループは、同じカリブ海の南方に浮かぶマルチニク諸島と並んで、フランスの県である。スペイン語と英語さえできれば、ラテン・アメリカ内ならどこでも通用すると思っていた私。ところが、まず電話で、現地のメンバーと訪問の約束をとることから壁にぶつかってしまった。たまたま、電話を持っているメンバーが母国語(フランス語)しかできなかったからである。

そこで、フランス語のできるパナマの友人に、こちらの電話口に来てもらい、用件を伝えてもらった。乗った機はエール・フランスのジャンボジェット機だった。こんな小さな島にもジャンボ機が、そしてあの超音速のコンコルドさえ離着陸できる飛行場が完備している。

上空から島を見下ろすと、青黒く見える部分があった。地上を車で走ってみると、それ

は延々と続く砂糖きびの畑だった。島では美しい自然環境を生かして観光客の誘致にも力を入れている。ホテル等の設備もなかなかのものである。

島の中学校で国語(フランス語)を教えているフランク・ブァンスノさんは、人なつっこい笑顔で友の活躍ぶりを語ってくれた。パリ留学中に仏法にめぐり合い島に帰ってきた青年や、島出身の男性と結婚して海を越えてきたパリジェンヌ。これらのメンバーが中心となって弘教の波が広がっていった。妙法の種子は、パリの風に乗ってカリブ海の小島にしつかりと根を張っていたのである。

私はメンバーの協力を得ながら、予定していたインタビューや写真の取材を順調に進めることができた。前年の9月にはこの島から6人のメンバーが日本での研修会に参加したという。島から空路8時間でまずパリに向かい、そこでフランスSGIのメンバーと合流して日本へ――。

「日本での研修は感激だった。私たちを迎えてくれた日本のメンバーの真心にも、感動と発心の日々でした」

こう語るブァンスノ
お礼にと、車を駆使し
にもあたってくれたの
日本を遠く離れた小さ
が真心に包まれている。
の絆の素晴らしさをか



さんは、日本で受けた真心の
て私を案内、メンバーの紹介
だった。日本の同志の真心が、
な島で花を開いて、今、自分
そう思うと、世界を結ぶ妙法
みしめずにはおられなかった。

島の一角で記念撮影を

さて、夜のホテルに戻ると、夕食会のレストランは、昼間の雰囲気とまったく趣を異にしていた。男性こそポロシャツに半ズボン姿もみられたが、女性は胸の大きく開いたロングドレスをまとい、香水の香りを艶やかに漂わせている。シャンペンやワインをあげ、バンドの演奏に乗って、チークダンスを踊る舞台には、これまたポロシャツに長ズボンをはいた東洋からきた“仕事男”はどうみても場違いだった。

早々に部屋に引き上げる。観光用に作られたリゾートホテルの部屋は、美しく優雅だった。部屋の真中には大きな鏡が、洗面所にはトイレと並んで白色のビデがついていた。どこまでいっても、ここは避寒地、ヨーロッパのバケーションの受け入れ地なのだ。

せっかくここまで来て、まじめ一本の新年号の取材だけでは物足りない面もあったが、マドモアゼルたちの海辺で戯れる美しい肢体の観察は、胸躍る楽しい記憶に残る旅ともなったのだった。